



Title	＜書評＞『ニューエクスプレスプラス エスペラント語』安達信明（著），2018年，白水社．A5判，本文164頁，CD付き，定価：3000円+税．
Author(s)	藤原， 敬介
Citation	外国語教育のフロンティア．2021， 4， p. 253-262
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79376
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評『ニューエクスプレスプラス エスペラント語』安達信明(著), 2018年, 白水社. A5判, 本文164頁, CD付き, 定価: 3000円+税.

Book Review: New Express Plus Esperanto, written by ADACHI Nobuaki, 2018, Hakusuisha, printed on A5 paper, pp.164 + CD, 3000JPY + Tax.

藤原 敬介

Abstract

This book review aims to provide a supplementary explanation of the textbook entitled *New Express Plus Esperanto* (Esperanto primer). The textbook is written with native speakers of Japanese in mind. There are explanations of the pronunciation mistakes that they unconsciously make. Some explanations take into consideration the difference between Esperanto and English because the latter is the first foreign language for most of the Japanese learners of Esperanto. In this review, some grammatical issues that may not have been mentioned, due to space constraints, are discussed. The latest information on the *Pasporta Servo*, a hospitality exchange service popular among Esperanto speakers, is provided as well.

キーワード：エスペラント語、発音、文法、語彙

1. はじめに

本書は白水社から出版されている「エクスプレス（プラス）シリーズ」の一冊である。同シリーズの他言語と比較して、エスペラント語は人工言語であり、文法がはじめから規定されているというところに特徴がある。だが、本書を一読し、音声をきけばわかるように¹⁾、エスペラント語という言語のふるまいそのものは、自然言語（民族語）とかわるところがない。むしろ、文法的な例外事項がほぼなく、語形成が容易であるために、学習しやすい言語であるということもわかるだろう。

本書の前身は安達（1988）である。その後、CDつきになった安達（2005）がでた。そして、全面改訂版の安達（2008）をへて、増補改訂版である本書がうまれた²⁾。本書の会話部分や解説は、基本的には安達（1988）を踏襲している。ただし、会話文をかきあらためたり、解説をつけくわえたりしたところが随所にみられる。内容をすこしでも充実させ、わかりやすくしたいという著者の誠実さが感じられる。

本書は、直接的には、安達（2008）の増補改訂版である³⁾。安達（2008）と比較すると、「簡単なスピーチの表現」、「簡単なメッセージの表現」、「文法チェック」、および簡単な読

み物二編⁴⁾が追加され、全体として12頁増加している。また、安達(2008)にみられた誤記のおおくが修正されている。

本書は、入手が容易であるだけでなく、音声ファイルも付属した理想的な教科書である⁵⁾。著者は言語学者であり、日本語母語話者が特に注意すべき点にも、言語学的観点に裏打ちされた配慮がみられる。ただし、初心者対象であるためか、説明が簡略化されており、ときとして事実と異なる説明がなされていることもある。

本稿では、まずはじめに、本書の長所を中心に紹介する。その後で、著者が百も承知で割愛したであろう内容を中心に、本書に対する補足説明をおこなう。

2. 本書の構成と特徴

本書は、「エクスプレス(プラス)シリーズ」の体裁にならっている。すなわち、まずはじめに言語についての簡単な解説がある。そして、文字と発音についてのべられている。そのあとは、見開き2ページの会話文と語彙や表現、次の2ページに会話文の解説があり、1課がおわる。そして、2課ごとに練習問題が配されている。そのほか、「ニューエクスプレス」シリーズから追加された「単語力アップ」や「表現力アップ」といった項目が合計4回提示されている。最後に、「はじめに」でのべたように、「ニューエクスプレスプラス」シリーズで追加された項目がならぶ。附録として主な接辞の一覧、関連詞表⁶⁾、そして本書にでてきた単語をまとめた語彙集がついている。

言語についての解説(p.8)では、(1)にしめすような内容がのべられている。

- (1) a. 「エスペラント」という名称は、もともとは創案者であるザメンホフのペンネームであり、意味は「希望する人」というものである⁷⁾。
- b. のちに「エスペラント」というペンネームが言語名としてもちいられるようになった。日本語としては「エスペラント」といっても「エスペラント語」といってもよい。
- c. エスペラントの語彙は、主として英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、ラテン語、ギリシャ語などの印欧語から採用されているという面では偏りがある。
- d. エスペラントの話者数は、習熟度をとわなければ、全世界で数十万人程度と推測される。中には「幼児期からエスペラント語を日常語として身につけたような人も少数ながら存在」する⁸⁾。

音声については、‘r’と‘l’、‘b’と‘v’、‘g’[dʒ]と‘j’[ʃ]の相違といった、日本語にはない区別であるから比較的意識しやすいところから、(2)にしめすように、日本語母語話者ならば無意識のうちにしてしまう発音の問題にも注意を喚起している。

- (2) a. p.14-15: 母音は日本語と同様に「アイウエオ」の5母音である。ただし、日本語と比較して、いずれの母音もはっきりと発音する必要がある。特に、「日本語ではこの「イ」が弱く発音されてしまい、自分では発音しているつもりでも音として聞き取れない場合⁹⁾がある」るので注意が必要であると強調されている。「ウ」と「オ」については、「唇を丸めて強めに」発音する。
- b. p.18: ‘n’ は、「うしろに母音が来ず、-n「ン」で終わる時も、きちんと舌先を上の前歯の裏につけて発音する」¹⁰⁾。

日本語母語話者のおおくにとって初修外国語である英語との相違にも注意をはらっている。たとえば (3) のような点である。

- (3) a. p.17: ‘j’の発音が「ヤ」のようなものであって「ジャ」のようなものではないこと。たとえば、‘japano’「日本人」は「ヤパーノ」のように発音する。
- b. p.29: 「英語などにある不定冠詞は、エスペラント語には」ないということ。
- c. p.45: 「不定詞が主語のときは *esti*+ 副詞形」であり、形容詞形があらわれないということ。たとえば、‘Lerni la anglan lingvon estas por mi malfacile.’ 「英語を学ぶことは私にとってむずかしい」という文では、最後の「むずかしい」にあたる単語を副詞形で ‘malfacile’ とすべきであるということである。形容詞形の ‘malfacila’ としてはならない。
- d. p.65: エスペラント語には「英語のような「時制の一致」」がないということ。たとえば「私は彼女にもう行かねばならないと言った」というとき、‘Mi diris al ŝi, ke mi jam devas iri.’ のように「行かなければならない」の部分は現在形で ‘devas iri’ とする必要がある。
- e. p.69: エスペラント語では「意味のない形式主語は不要であり、主語がないので形容詞は使えず副詞を使う」ということ。たとえば、「今日は暖かい」というとき、‘Estas varme hodiaŭ.’ のように「あたたかい」という部分は ‘varme’ と副詞形をつかうべきであり、形容詞形の ‘varma’ をつかってはならない。

入門書ではあまりふれられない点までこまかく言及していることがある。たとえば (4) のようなものがある。

- (4) a. p.45 指示詞: 「tio は通例単数形でしか用いられ」ない。指示代名詞である ‘tio’ には「これ、それ、あれ」あるいは「このこと、そのこと、あのこと」という意味がある。そして、理論的には ‘tioj」 という複数形が可能であるけれども、実際には

単数形でしか使用されないということを説明している¹¹⁾。

- b. p.75: 造語法における挿入母音の選択。「単語と単語の結合部で子音が続いて発音しにくい場合には、**口調上の母音**を挿入することがある」と説明されており、「挿入する母音は -o- が普通」とされている。具体例として「参加する」‘partopreni’ (‘part’ 「部分・関与」、‘preni’ 「とる」) の例があがっている。ただし「意味上 -a- や -e- になることもある」として、「最近」‘lastatampe’ の例があがっている。ここでは、‘lasta’ が「最近の」という意味の形容詞である。本来は「時間」という名詞である ‘tempo’ を修飾する。したがって、「時間」の部分の副詞形の ‘tempe’ になったときも、‘lasta’ の部分が形容詞形のままとこっている¹²⁾。

3. 本書に対する補足説明

本節では、おそらくは紙幅の都合で本書では説明されていないであろうことを中心に、筆者が気づいた点についてのべる。

3.1 本課

- (5) a. 第1課 p.24 1. 人称代名詞: 二人称単数の形式としては、特にしたしみをこめた形式として ‘ci’ という形式もある。
- b. 第1課 p.24–25 3. 動詞の現在形: 動詞の現在形語尾は ‘-as’ であり、例外なく動詞の語幹につく。ただし、瞬間的な動作をあらわす動詞は、一般に現在形語尾をとらない。
- c. 第1課 p.25 5. 疑問詞: 「疑問詞は常に文頭に置かれます」という記述は、基本的には正しい。ただし、特に強調するようばあいには、文末にくることもある。たとえば、‘Mi volas, ke vi donu al mi vian novan aŭton! — Vi volas **kion**?!’ 「私にあなたの新車をくれるようにしてほしい! — 何がほしいって?’ (Wennergren 2005: 331) という例がある。
- d. 第2課 p.27 慣用表現: ‘Ĝis revido!’ 「さようなら(また会うまで)!」や ‘Ĝis morgaŭ!’ 「またあした(あしたまで)!」といった表現が紹介されている。エスペラント語では、そこからさらにすすんで、単に ‘Ĝis!’ のみで「ではまた!」という意味をあらわすこともできる。この ‘ĝis’ は本来は「～まで」という意味をあらわす前置詞である。前置詞が単独で文としてもちいられる例は、通言語的にも稀であるとおもわれる。
- e. 第8課 p.59 3. 接頭辞 ge-: 「男女ともに合わせて表現するための接頭辞」である ‘ge-’ をつけた名詞は複数形になると説明されている。そして、具体例として ‘gepatroj’ 「両親」などがあがっている。ただし、形容詞にすると、単数形もありうる。たとえば ‘gepatra lingvo’ 「両親の言語 (母語)」といえ、両親がどちらもおなじ言

語をはなす。複数形で‘gepatraj lingvoj’ といえ、両親が複数の言語をはなすということになる。

- f. 第10課p.69 3. 不定代名詞 *oni* の用法: 不定代名詞 *oni* はフランス語の不定代名詞 *on* に由来する。フランス語の *on* は主語としてのみもちいられる。エスペラント語の *oni* も、一般的には主語としてもちいられる。しかし、文脈さえあたえられれば、主語以外の用法も可能である¹³⁾。たとえば‘Proverboj estas ne nur viaj, sed la oniaj.’「諺はあなたのものではなく世間のものだ」(『エスペラント日本語辞典』p.810) や、‘La malpura aero malsanigas onin.’「汚い空気が人々を不健康にする」(Wennergren 2005: 107) といった例がある。
- g. 第15課p.98: ‘preferi A al B’ で「BよりもAを好む」という意味であり、比較をしめす接続詞である「olの代わりにalがもちいられる」と説明されている。ただし、‘preferi A ol B’ という表現もある。たとえば‘Mi preferas vinon ol bieron.’「ビールよりワインが好きだ」(『エスペラント日本語辞典』p.906) といえる¹⁴⁾。
- h. 第19課p.123: 本来は接頭辞であるものが品詞語尾につけずに単独の語としてもちいられている例があがっている。開始をあらわす接頭辞‘ek-’が、‘Ek!’ 単独で「さあ!」という意味になっているものである。このように、接頭辞が間投詞としてもちいられる例は、通言語的にもめずらしいのではないかとおもわれる。
- i. 第20課p.127 Pri kio temas?: この文は無主語文である。ただし、‘temi pri」「主題である・主題とする」という動詞は、無主語文として使用することもできるし、主語をとることもできる。たとえば‘Lia artikolo temis pri la konservativismo.’「彼の記事は保守主義に関するものだった」(『エスペラント日本語辞典』p.1147) のように、主語をとる例もある。

3.2 その他

- (6) a. p.89表現力アップ:「ほら雨が降り出した」という文が‘Jen ekpluvus!’となっている。瞬間的な動作をあらわすばあい、規範的には現在形はつかえないので、‘ekpluvus’のように過去形にしたほうがよいとおもわれる。ただし、あえて現在形にすることで、眼前の状況を活写する効果を意図しているかもしれない。
- b. p.99: エスペラント語の雑誌
渡辺 (2010: 23) によれば、本書で紹介されているアメリカの経済誌である *Ekonomia Bulteno pri Usono* は1996年3月をもって廃刊となっている。また、*El Popola Ĉinio* は、2000年12月をもって紙媒体での発行はおわり、Web版のみとなっている。
- c. p.105: 家庭宿泊提供者網 (Pasporta Servo)
本書で紹介されている情報はふるいので、2020年10月現在の状況を簡単に紹介

しておく。Pasporta Servo とは、本書で紹介されているように、世界各地のエスペラント語話者が、エスペラント語話者を対象にして、無料で家庭に宿泊させてくれるというサービスである。公式には1974年にはじまった。もともとは小冊子で発行されており、購入した人だけが宿泊することができた。しかし、2008年からWeb版が開始され、冊子版は利用できなくなった（ようである）。Web版での解説によると現在113カ国の1581都市から2214人の登録者がいる¹⁵⁾。Pasporta Servoを実際に利用するには、登録して連絡をとり宿泊するまで、すべてのやりとりをエスペラント語のみでおこなう必要がある。これは初学者には不可能である。だが、本書をまじめに学習すれば、できるようになっているとおもわれる。

- d. p.144-145: 男性の愛称をあらわす接尾辞‘-ĉj-’および女性の愛称をあらわす接尾辞‘-nj-’は、不規則な語形成をする。一般的な接尾辞は、なんらかの語根に付加する。しかし、‘-ĉj-’と‘-nj-’だけは、語根から（おおくのばあい）第一音節をきりとして付加する。たとえば、‘patro’「父」の第一音節である‘pa’に‘-ĉj-’がついて‘paĉjo’「お父ちゃん」、‘patrino’「母」の第一音節である‘pa’に‘-nj-’がついて‘panjo’「お母ちゃん」となる。これはエスペラント語の基本文法であるZamenhof (1905)にもあがっているものであるから、エスペラント語としてはただしい語形成である。しかし、不規則な語形成であることはいふまでもない。このような接尾辞は使用しないほうがよいと筆者はかんがえている。

4. 誤記・誤植

筆者が気づいた誤記・誤植の類は以下のとおりである¹⁶⁾。いずれも些末なものであり、内容の理解に影響をあたえるようなものではない。なお、エスペラント語のカナ表記については、特に母音の長短については、一般的な発音とは異なるものも散見される。しかし本稿では、特に注意を要するものだけを指摘するにとどめた¹⁷⁾。

1. *p.9: ヴァウイストック→ビャウイストク
ポーランド語での表記ではBiałystokである。
2. p.9: 「エスペラントの創始者ザメンホフ」→「ザメンホフ：エスペラントの創始者」とするのが書誌的にはただしい。また、訳者として水野義明氏の名前もだしたほうがよい。
3. p.10: 「エスペラント日本語辞典」(2006年) および「日本語エスペラント辞典」(1998年)の出版元は、日本エスペラント協会ではなく、日本エスペラント学会とするのが書誌的にはただしい。日本エスペラント学会が日本エスペラント協会と改称したのは2012年であるからである。なお、p.75ではただしく「日本エスペラント学会刊」とされている。

4. *p.11: 1900年 (キューバ) → 1990年 (キューバ)
5. p.11: 「(ファウスト (ゲーテ))」 → 「ファウスト (ゲーテ)」
6. p.15 ĉambro: チャンブロ → チャムブロ
7. p.23 慣用表現: こんにちは → こんにちは
8. p.29 5. 数詞: セブ → セブ
9. p.32 第3課の表題の上: leciono tri → Leciono tri
10. p.32 bedaŭrinde: ベダウリンデ → ベダウリンデ
11. p.40 練習問題2 3-2: ソンジョ → ソンヂョ
12. p.41 練習問題6 6-6: そのパン → そのパンを
13. *p.43 verdan stelon: 緑星章 (緑の星) → 緑星章 (緑の星) を (目的格形)
14. p.46 本文1行目: インヴィタス → インヴィータス
15. p.47: 日本エスペラント学会 → 日本エスペラント協会
3でふれたように、2012年から日本エスペラント学会は日本エスペラント協会と改称しているので、ここでは日本エスペラント協会としたほうがよい。
16. p.56 本文最終行: **double** → **duoble**
英語の「ダブル」のような綴りになっているのはまちがいの。直前の2行のように表記するのがただし。
17. p.59 -obl-の解説: 例としてでている単語はすべて‘-obl-’のように**ob**のみ**太字**になっているけれども、**l**までふくめて**太字**とすべきである。
18. p.60: セパ → セーパ
19. p.65 2行目 sinjoroのカナ表記: 一文字一音の原則からすれば「スインヨーロ」と発音してもよさそうなものではあるけれども、実際には「スィニヨーロ」のように発音される。同様の表記はp.113にもみられる。
20. p.73: 会話文の5人目: マリア → マリコ
21. p.88 教会: preĝejo → preĝejo、プレジェーヨ → プレヂェーヨ
22. p.100 肩 ŝultro: シェルトロ → シュルトロ
23. p.100 スーツ ensemblo: エンセンブロ → エンセムブロ
24. p.101 「私の時計では4時半です」の laŭ: ラウ → ラウ
25. p.113 jarojn: ヤーロイン → ヤーロイン
おなじものが二箇所ある。
26. p.114 下から2行目: keの前には、規範的には、‘;」 「コンマ」をいれるべきである。
27. p.116 6行目: **イタリックの部分** → **太字の部分**
当該の単語は安達 (2005: 104) まではイタリックであったけれども、安達 (2008: 116) からは太字になっている。

28. p.128 -onte の例文: ke の前には、規範的には、‘;」「コンマ」をいれるべきである。
29. p.136 6.: 助数詞 → 序数詞
30. p.140 本文7行目: felice → feliĉe
31. p.140 下から3行目: riĝardas → rigardas
32. p.141 慣用表現: riĝardi ~ kiel ... → rigardi ~ kiel ...
33. p.142 下から5行目: spcojn → specojn
34. *p.144 男性の愛称: peĉjo → Peĉjo
35. *p.157 ne nur: ne nur A sed ankau~B → ne nur A sed ankaŭ B
36. *p.161 sinjoro: 既婚の男性に → 成人男性に

注

- 1) 本書の音声は綿貫アレクサンドラ氏と北川久氏による。綿貫氏はポーランド出身のポーランド語母語話者である。エスペラント語の発音は、アクセントが次末音節におかれるなど、ポーランド語と共通するところがおおい。ポーランド語母語話者によるエスペラント語の発音は、典型的な発音の一種といえるだろう。なお、余談ながら、世界の諸言語のカatalogueである Eberhard et al. (eds.) (2020) では、エスペラント語は、創始者であるザメンホフの出身地をとってポーランドの言語とされており、ISO 639-3 のコードとして ‘epo’ があてられている。
- 2) 出版にいたる経緯は著者自身によって三度活字となっている (安達 1989、2006、2009)。
- 3) 本書の前身である安達 (2008) については、渡辺 (2010) による書評もある。
- 4) 読み物のうち一編は「日本について」というもので、『ニューエクスプレスプラス』シリーズで共通している。
- 5) 筆者は2014年度後期から大阪大学でエスペラント語の授業を担当している。安達 (2008) を教科書にしようとおもったこともある。だが、学生にとって2600円という値段は決して安くはない。そこで、阪 (2014⁴) を教科書として使用している。阪 (2014⁴) は500円と安価であり、わずか32頁に内容が凝縮され、語彙集までついているのがよい。ただし音声ファイルがなく、内容はやや高度である。したがって、しかるべき指導者なしには学習がむずかしい。安達 (2008) や本書は、値段が学生にとっては負担になるという点と、教科書としてはやや誤記がおおいという点をのぞけば、説明が丁寧であり、よい教科書である。独習者にもすすめられる。
- 6) 関連詞表とは、日本語でいう「こそあど」ことばのようなものである。エスペラント語では、指示、疑問、不定、普遍、否定に対して事物、人・モノ、性質、所有、場所、様態、理由、時、数量をかけあわせた45の関連詞がある。ただし本書では、一部の関連詞が説明されるだけである。関連詞表全体が解説されていない点が残念である。なお、関連詞表と所有にかかわる問題点については藤原 (2018) で解説したことがある。
- 7) エスペラント語の最初の教科書である *Unua Libro* 『第一書』では、この言語は “Lingvo internacia” 「国際語」と称されている。
- 8) エスペラント語母語話者として (エスペラント界では) 著名な人物として Leo SAKAGUCHI 氏がいる。 *The Universal Language* (2011) という短編ドキュメンタリー映画の中で氏がエスペラント

語ではなしている部分の動画がYoutubeでも公開されている (<https://www.youtube.com/watch?v=bGkdC5wYTNk> 2020年10月28日確認)。なお、エスペラントの母語化をめぐる問題については角谷(1998b)も参照。

- 9) 日本語にみられる、いわゆる母音の無声化現象が無意識にでしてしまうことをいっている。
- 10) 日本語母語話者の発音では、語末の「ン」は[n]のように発音される。エスペラント語では、対格標識である‘-n’が語末にくるため、語末における‘-n’の使用頻度がたかい。ただし、エスペラント語の単語は、一部の副詞や助詞をのぞけば基本的には母音でおわる。子音でおわるとすれば、複数形標識の‘-j’であるか、対格標識の‘-n’があることが頻度としてはほとんどである。語末で‘-n’が他の鼻音と対立する例には、‘kion’「何を」に対する‘kiom’「どれくらい」がある。しかし、それ以外にはほとんどないといってよい。したがって、語末の‘-n’の発音が[n]でなく[N]であったとしても、そのために意味が通じなくなるということは、実用的にはほほないといってよい。
- 11) なお、‘tio’と同系列の相関詞にも複数形はない。すなわち、‘kio’「何」、「io’「あるもの」、「cio’「すべてのもの」なども複数形にはならない。
- 12) 挿入される母音が‘-e-’である例がこのページにはあがっていない。本書ではp.116に‘pruntedoni’「貸す」という例がある。この語は、‘prunte’「貸して」という副詞形が‘doni’「与える」という動詞と結合した複合動詞である。そのほかの例としては、たとえば‘posteulo’「後輩、後継者」がある。この語は、‘post’「後」という前置詞に、‘人」をあらわす接尾辞である‘-ul-’がついた名詞である。したがって‘postulo’としてもまちがいではない。しかし、‘postulo’は、「要求(する)」‘postul’という語根に名詞語尾である‘-o’がついたものと誤解されるおそれがある。そこで、挿入母音として‘-e-’をつけている (Wennergren 2005: 528)。
- 13) エスペラント語は、特に語彙については、ヨーロッパ語にかたよっている。しかし、素材はヨーロッパ語であっても、エスペラント語にはエスペラント語の文法があり、その文法がゆるす範囲で、ヨーロッパ語にはない用法を独自に発達させることがあるという例である。エスペラント語は表面的にはヨーロッパ語であるけれども、深層構造ではむしろ膠着語的性格をもつということを論じたものにピロン(1981)がある。
- 14) 『エスペラント日本語辞典』(p.906)には、‘preferi’をもちいたときに‘al’をつかうか‘ol’をつかうかについて「ヨーロッパ諸語における同等の表現のなぞりと感じられる点を嫌い(中略)あえてolを使う人もいる」という説明がある。
- 15) <https://www.pasportaservo.org/pri-ni/> (2020年10月30日確認)。なお、冊子媒体時代の*Pasporta Servo*については角谷(1998a)による秀逸な書評がある。
- 16) 筆者が参照しているのは2019年4月15日発行の第2刷である。なお、渡辺(2010)でも指摘されているものについては*をつけてしめた。
- 17) たとえば第一課にあらわれる‘nun’は「ヌーン」よりは「ヌン」が普通の発音である。実際、安達(2005: 18)では「ヌン」と表記されている。また、本書でもp.32の第三課では「ヌン」とされている。ただし、意思疎通を阻害するほどのものではない。ほかにもそのような例は散見されるけれども、逐一指摘しない。

参考文献

安達 信明

- 1988 『エクスプレスエスペラント語』 白水社、東京.
- 1989 「1 冊の本 (11) エクスプレスエスペラント語」『エスペラント』 825: 44.
- 2005 『CD エクスプレスエスペラント語』 白水社、東京.
- 2006 「わたしの出した1冊の本『CD版エクスプレスエスペラント語』」『エスペラント』 1018: 19.
- 2008 『ニューエクスプレスエスペラント語』 白水社、東京.
- 2009 「わたしの出した1冊の本『ニューエクスプレスエスペラント語』」『エスペラント』 1060: 12.

角谷 英則

- 1998a 「個人的書評：Pasporta Servo 1998」 *La Junuloj* 35: 掲載ページ不明.
https://researchmap.jp/kadoyah/published_works (2020 年 10 月 30 日確認)
- 1998b 「エスペラントの母語化をめぐる問題」『不老町だより』 3: 40-43.

阪 直

- 2014⁴ 『20 のポイントで学ぶ国際語：エスペラント入門』 日本エスペラント協会、東京.
- 日本エスペラント学会エスペラント日本語辞典編集委員会
- 2006 『エスペラント日本語辞典』 日本エスペラント学会、東京.

ピロン、クロード (著)・水野 義明 (訳)

- 1981 『エスペラント語の位置測定：ヨーロッパ語かアジア語か』 名古屋エスペラントセンター、名古屋.

藤原 敬介

- 2018 「エスペラント語の所有形にみられる規則性と不規則性」『外国語教育のフロンティア』 2: 379-385.

渡辺 克義

- 2010 「書評：安達信明『ニューエクスプレス エスペラント語』」『エスペラント研究』 4: 21-26.
- Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fennig, eds.
- 2020 *Ethnologue: languages of the world. Twenty-third Edition*, Dallas, Texas: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com> (2020 年 10 月 30 日確認)

Wennergren, Bertilo

- 2005 *Plena Manlibro de Esperanta Gramatiko*. Esperanto-Ligo por Norda Ameriko, El Cerrito, Kalifornio, Usono.

Zamenhof, Lazaro Ludoviko

- 1905. *Fundamento de Esperanto*.
<https://www.akademio-de-esperanto.org/fundamento/> (2020 年 10 月 30 日確認)